

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2018 秋号 **84**

公益財団法人 和歌山県文化財センター



特集 旧西村家住宅の保存修理（3）



写真上：瓦葺き前の主屋屋根（南東より見る）

写真下：主屋南東隅での軸組修理の様子

特集 旧西村家住宅の保存修理 (3)

一、はじめに

新宮市の重要文化財・旧西村家住宅（西村記念館）では、平成28年夏からの保存修理工事も丸2年が経過しました。主屋では、軸組や床組の補修、屋根や壁の下地などの復旧をおおた終えて、屋根の瓦葺きや壁の土塗り作業、窓や扉などの補修、取り付けに取り掛かっています（写真1〜4、表紙写真）。

本誌でも77号と81号で特集記事を掲載してきました。77号では解体工事の様子と外壁仕上げの特徴、81号では基礎工事や木工事を進める中で新たにわかった立地や間取

り、内装や外装などの特徴について紹介してきました。

本号では、主屋修理中の調査で新たにわかった内容のうち、大正3（1914）〜4年の建築中に生じた設計の変更など当時の様子を探ってゆきます。また、81号で紹介した修理完成後の姿である大正末期頃の改修について、その経緯なども解説してみます。その上で、大正時代に西村伊作氏（以下「伊作氏」）がこの建物で試みたこと、また、そこに込められた彼の思いにも迫ってみましたと思います。



写真1. 主屋南東での軸組補修中の様子
（組み上がった状態が表紙下の写真）



写真4. 主屋北東での施工の様子（上から順に、軸組復旧、壁下地復旧、内壁土塗りの状況）



写真3. 内壁土塗り・天井漆喰塗りの様子
（上：食堂張出部、下：事務室）



写真2. 屋根土居葺き（上）・瓦葺きの様子
部材は可能な限り再利用しています。



二、大正期の建築の様子

旧西村家住宅の主屋は、伊作氏が大正4年に自ら設計と監督をした3度目の自邸になります。外周にはガラスをはめた窓や扉を縦横に整然と並べた洋風の出で立ちですが、室内は畳敷きの部屋も多く、橙色や青色などの砂壁で彩られました。そして、電気やガスに加えて給湯（地下室のボイラーでお湯を沸かす）や水洗の便所、浄化槽などを備えました。

主屋を建てた4年後の大正8年に、伊作氏は『楽しき住家』（以下『住家』）という本を著します。当時は同じような本も多く出版されましたが、その大半が「こういう家だと暮らしやすいのではないか」と抽象的なものが主流でした。『住家』は、自邸

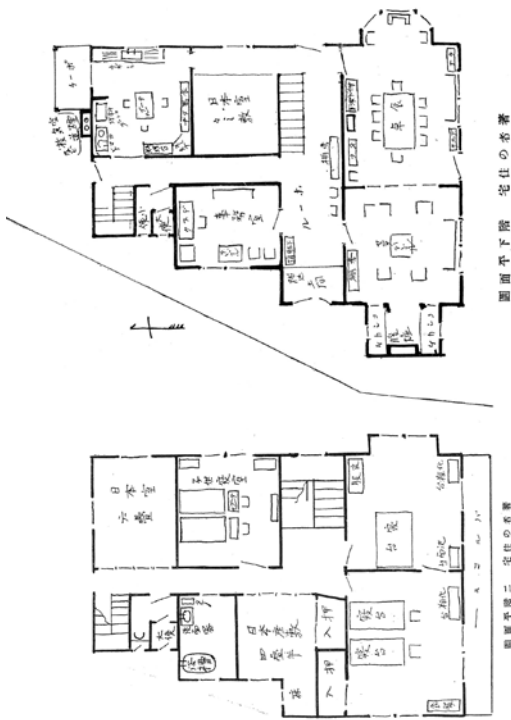


図1. 『楽しき住家』掲載の「理想的な家」の間取り（上が1階、下が2階の平面図）



写真5. 事務室北東に存在した通用口（矢印先）
壁面の一區画（内幅45cm分）に扉が付けられていたことがわかりました。

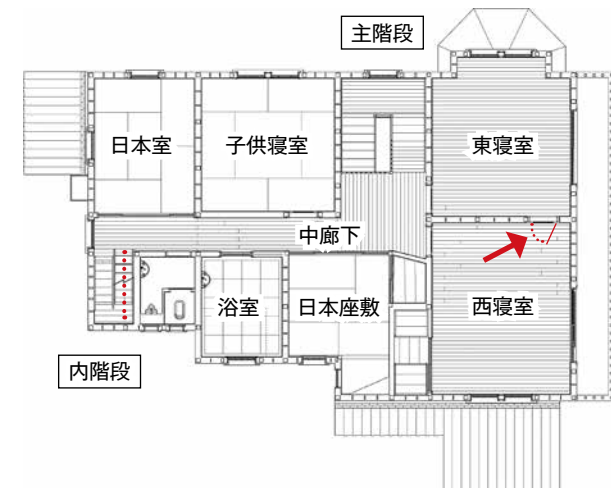


図3. 大正4年時の主屋2階平面図（下側が西面）
東寝室・西寝室境に開かれた扉の開き方が、『住家』とは逆勝手となっています（矢印部分）。



図2. 大正4年時の主屋1階平面図（下側が西面）
事務室に中廊下へ抜ける通用口が存在すること（矢印部分）に『住家』との違いがみられます。

を3度建築した経験や、そこへ分析も加えながら解説した具体的な内容が並び、現代のガイドブックとしても十分な程の情報量を備えています。

左の図は『住家』に掲載された「理想的な家」の間取りです。現在の主屋ととてもよく似ています。ここでは、この「理想的な家」という表現に注目しながら、大正4年建築時の様子や同10年代の改修時の様子を、順に追ってゆきます。

(1) 建築中におこなわれた工夫

下の図は、修理中の調査結果を基に描いた、大正4年完成時の主屋の平面図です。『住家』掲載の図面との違いは、事務室に中廊下へ抜ける通用口が開く点です（写真5）。

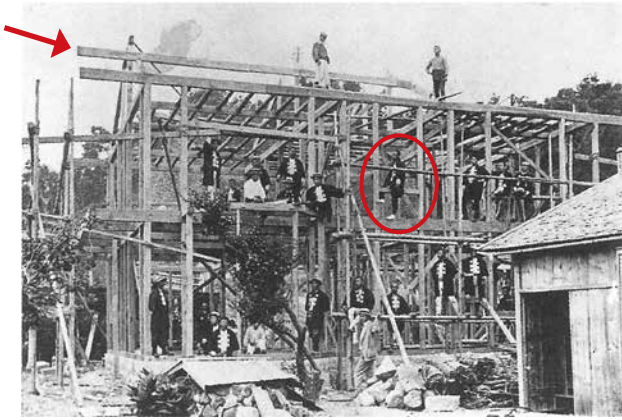


写真6. 上棟式の様子（ルヴァン美術館所蔵）

手前の帽子を被った人物が伊作氏。丸で囲んだ職人がまたがる部材（窓台）は、完成時までに切除されました。

また、小屋組も「和小屋」という形式から「クインポスト（対東形式）」といふトラス構造に変更されました（矢印）。

接客時に台所から給仕するために設けられたものと考えられますが、4年後（『住家』出版時）の伊作氏にとってはあまり重要視されなかった様です。

ではそれ以外で、理想を実現するためにどんな工夫があったのでしょうか。

左の写真6は、上棟式の様子を撮影したものです。この古い写真からも今回多くの情報が得られました。一つ目は、主階段東面の上下窓（写真内の丸囲み部分）が他よりも低い位置に変更されたことです。そして、その内側の壁面にも修理ではない施工の痕跡が存在します。上棟式以降、室内の壁塗りの段階で、踊り場の



写真7. 切除された窓台（破線部分）

柱には窓台を取り付けた際の仕口も残ります。



写真8. 主階段北側の内壁に残る改変痕跡

矢印先の破線部分に、補修ではない壁土の境界線（塗り継ぎ痕跡）が存在します。建築中に上下窓を他の部屋と同高に設定したことや、内壁の下塗り後に現在の高さにまで低く改めたことがわかりました。

ある階段に計画し直したことがわかってきました（写真7・8）。

二つ目は小屋組の形式変更です。上棟式の時点では「和小屋」と呼ばれる伝統的な形式なのですが、実際はトラス構造が採用されており、屋根裏には一面に床板が敷かれました（写真9）。また、それに関係する施工も今回確認できました。建物北西に設けられた内階段は、建築途中で便所側の壁を（図2・3の破線の位置から）南側へ30cm移動させて幅広く計画し直し、一階から屋根裏まで続く連絡路となりました（写真10）。

こうした点に関して伊作氏は、「寝室とは別の遊ぶ室を」「屋根裏

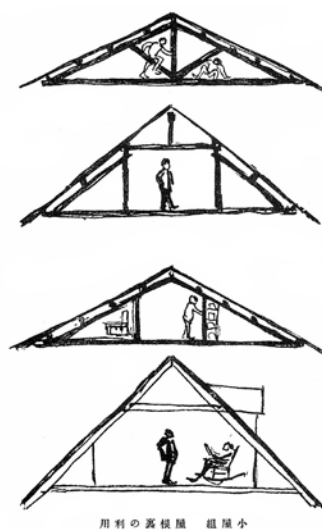


図4. 『住家』で小屋組の活用方法を紹介した伊作氏の挿図（スケッチ）

主屋では上から2番目の形式が採用されています。



写真9. 主屋の屋根裏（北側を見る）
屋根裏へは左奥の内階段から上ります。



写真10. 内階段まわりの改変痕跡

写真の破線位置へ柱を建てた後に、南側へ建て替えたことが確認できます。

などを応用して「子どもに提供することを薦めています。階段に踊り場を設けることにも「安全のためには必要」と述べるなど、そこには子どもへの視点が常に存在していた様です。

(2) 大正期改修の経緯

77号、81号でも触れてきた通り、2階の西寝室は、板敷きの部屋に畳を敷き込んで、第2、第3の子供部屋とされました。『住家』でも「扉を開いても畳を擦らぬ様」な納まりなども考えて設計することを提言しています。それに加えて電気のスイッチを子供寝室と同じ高さに下げるなどの配慮も欠かしませんでした(写真11)。

また、修理中の調査によって、ベランダ



写真 11. 西寝室での室内復原検討の様子

修理前に他室の畳を利用して検討をおこなった際のもの。上の写真は大人を目線で、下の写真は子どもの目線で撮影し、比較してみました。電気のスイッチ(矢印先)も子どもにとってはやや高く感じられたのでしょうか。

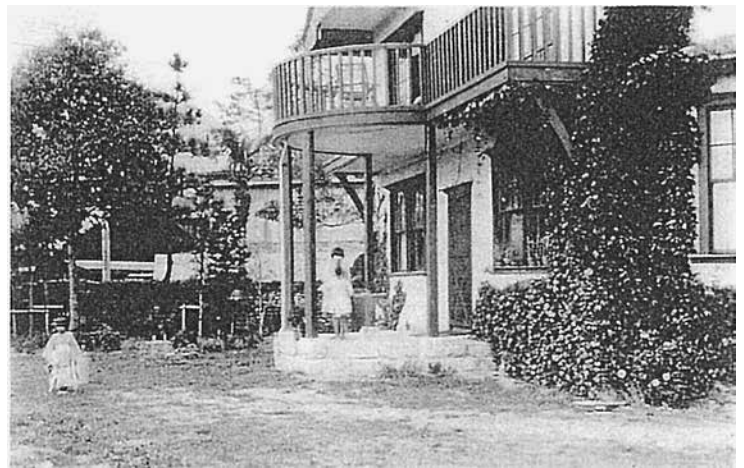


写真 12. 大正末期頃の主屋南側(ルヴァン美術館所蔵)

テラスに立つ女性は次女・ユリ氏と伝われます(左側は五女・ナナ氏か)。バルコニーにはチェアが置かれ、『住家』で述べた空間として実際に活用した様子もうかがえます。

今回の保存修理工事は昭和初期の状態へ復元的に修理するため、主屋南側もこの古写真に近いすがたとなります。

にバルコニーが付属されたのもこれらと一連の施工であることが確認できました。「室内と室外との中間で」「自然に親しみつつ読書し、談話する場所としてよい場所」と考えていたことから、伊作氏の子どもに対す

る思いがうかがえます(写真12)。大正期改修の契機は外壁が蔦によって傷んでしまったことでもありますが、その際に給水設備や浄化槽の増強をおこないながら、子どもたちへの配慮も大事にされていました。そしてここに伊作氏の求めた「理想的な家」が完成したのでしょうか。

四、おわりに

今回の特集記事も、やはりというか、「子どもたちのための環境作り」というところに落ち着いてしまいました。建築や家具、美術や工芸など多岐にわたって才能を発揮された伊作氏ではありますが、それらを介して目指したのは若者の教育、それも人材としてではなく人間としての教育にあっただろうと思います。

これまで建物の修理でその様などころまでは考えてこなかった筆者ですけれど、これも伊作氏からのメッセージでしょうか、新宮市民憲章にもある「未来の子どもたちのために」「こころ豊かなひとを育む」土地柄で過ごすなかで、筆者も自然と感化されてきたのかもしれない。

今回の保存修理が地元の若者にとっても伊作氏らの「志を継ぐ」一助となるよう、残りの工事にも力を思いを注いでいきたいと思っています。

(下津健太郎)



吉礼Ⅲ遺跡の発掘調査

和歌山県から委託を受けて、和歌山橋本線道路改良工事に先立ち、吉礼Ⅲ遺跡の発掘調査を実施しました。調査は、平成30年2月から同年5月まで行い、調査面積は約1,150㎡です。

吉礼Ⅲ遺跡は、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図（和歌山県教育委員会2007）』によると、弥生時代の散布地とされています。しかし、これまでに発掘調査が行われたことがなく、その実態はよくわかっていませんでした。

今回の発掘調査を行ったところ、12世紀～14世紀後半の流路1条、10世紀後半～13世紀の自然流路1条、15世紀以前の自然流路1条、15世紀前半の溝2条、水田2枚、それに伴うとみられる畦畔1本、流路1条、15世紀～16世紀前半の鋤溝等を多く検出しました。とりわけ、15世紀前半の水田は、それに伴うとみられる畦畔、流路、流路か

ら水田への取水口が残っており、当時の状況がよくわかります。

以上のことから、当該地は15世紀前半には北側にある本谷池等から灌漑用水をひき、耕作地として利用されていたものと推測され、15世紀前半から16世紀前半には調査区全体が水田となり、畦畔の位置を変えながらも、現代に至るまで連続と水田が営まれてきたと考えられます。

和歌山市吉礼は、古代から中世の「吉礼郷」にあたりとされ、中世には西に日前宮領和太荘、東に根来寺領山東荘さんとうがあり、強力な勢力が所領する地域のはざまにありました。文献史料によると、12世紀には三上院に、14世紀後半以降は三上荘に属していたようで、15世紀前半には足利義満側室高橋殿（北野殿）の所領であり、16世紀後半には室町幕府の直轄領であったことが知られていますが、その実態はよくわかっていません。

今回の発掘調査により検出された遺構は、

これら荘園等に関わるものである可能性もあり、当該地の歴史の一端を知る上で重要な成果となったといえるでしょう。

（金澤 舞）



吉礼Ⅲ遺跡発掘調査 水田等検出遺構（南から）

写真を撮る際に、室内等の採光が少なく暗い場所では、カメラに内蔵されたフラッシュを使って、撮影をされる方も多いと思います。その写真を見て、カメラを向けた手前の部分は、きれいに撮れても、真後ろには影が残ってしまい、周りに写っているものが、暗くて良く見えない出来映えになったという経験はないでしょうか。

修理現場では、部材の納まり等の詳細な記録を目的として撮影する事もあります。その時、撮影照明が室内全体に届かずに、所々に、影が出来ている写真を残してしまうと、その一枚の記録から読み取れるはずだった建物の情報が、抜け落ちてしまいます。そこで、レフランプという、写真用の大きな白熱電球を撮影照明として使用しています。この電球を、クリップの付いたソケットに取り付けて、固定したり、手持ちで振って照明範囲を拡げたりして、ライティングしています。撮影は、カメラがブレないように三脚に固定し、シャッタースピードを遅くして、沢山の光を取り込んで行きます。シャッターがおきるまでの間、レフランプをかざしたときの影の現れ方を意識して、照明が思い通りの均一さで行き渡っていくように、振ったり、角度を変えたりと、影が消えるように位置を動かします。同じ構図でも、優れた記録写真になるかどうかは、光の当て方次第という事です。

修理現場での写真の難しさは、再び同じ状況で撮影することが出来ないことです。後悔しないように、肝に銘じて照明と向き合おうと常々考えています。

(大給 友樹)



レフランプ

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

新宮文化の多様性 埋蔵文化財課

五月の連休明けから和歌山県の南東端、隣はもう三重県という新宮市で大規模な発掘調査に従事しています。「新宮城下町遺跡」というのがその遺跡名で、その名前が示すように江戸時代の新宮城に係る城下町の調査なのですが、その時代のみならず下層には中世、熊野詣が華やかだった頃の湊跡みなとあとと考えられる遺跡が眠っています。さらにその下層には縄文時代の遺跡の存在も想定されています。

筆者にとって新宮での調査は初めてのことではなく、これまで新宮市の西郊に所在する八反田遺跡はつたんだなどいくつかの遺跡の調査に当たってきました。そのつど思い、今回もあらためて思ったことですが、新宮は出土遺物が多様な地域ですね。東国の土器と西国の土器が実にバラエティ豊かに混在して出土します。

もちろん和歌山市内も含めて紀ノ川流域の調査でも在地の土器だけではなく、各地の土器が出土します。たとえば弥生時代ですと河内や和泉地方の土器が一定量見られますし、かなり遠隔地の土器も稀に見かけます。それに比べて新宮はその量が多いとともに偏ることなく東西の土器が出土します。八反田遺跡では、それまで見たこともなかった弥生時代の東海系の土器だけではなく、瀬戸内地方の土器も確認されています。現在調査している新宮城下町遺跡でもこのことは同じで、ひとつの穴の中から伊勢地方の土鍋はちりと播磨地方の土鍋が揃って出土するというおもしろい現象が多々見られます。

こうした多様性は言うまでもなく新宮の置かれている立地条件、海上交通の要衝に位置することに起因しています。新宮は東西文化の接点とも言うべき場所ですね。

このような物流のみならず熊野詣にみられる人々の往来が新宮の文化の多様性を育んだのでしようし、その豊饒な文化ほうじょうが、建築家西村伊作、文豪佐藤春夫、さらには大逆事件で名高い大石誠之助といった稀有な人材を輩出させたのかもしれない。

(村田 弘)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2018年秋～2018年冬)

(公財) 和歌山県文化財センター

- 「紀州のあゆみ 一和歌山県内埋蔵文化財発掘調査成果展一」 2018年11月 3日 (土)～12月 2日 (日)
会場：田辺市立歴史民俗資料館

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 秋期特別展「黒潮の海に糧をもとめて 一古墳時代の海の民とその社会一」
2018年 9月29日 (土)～12月 2日 (日)
- 特別展記念講演会 2018年10月 6日 (土) 13:30～15:00
- 特別展講座① 2018年10月20日 (土) 13:30～15:00
- 特別展講座② 2018年10月27日 (土) 13:30～15:00
- 特別展講座③ 2018年11月 3日 (土祝) 13:30～15:00
- 特別展講座④ 2018年11月10日 (土) 13:30～15:00
- おしゃべり考古学④ 2018年11月16日 (金) 13:30～15:00
- 館長講座③ 須恵器の話あれこれ 2018年11月17日 (土) 13:30～15:00
- おしえて!!ヤマゲン先生④ 万葉歌と古代の草木花ガイド 2018年11月24日 (土) 10:00～12:00
- 連続講座「岩橋千塚⑧」 2018年11月25日 (日) 13:30～15:30
- ミニ展「ジュニア考古学研究応募作品展」 2018年12月18日 (火)～2019年 1月14日 (月祝)

和歌山県立博物館

- 企画展「和歌山の文化財を守る 一仏像盗難防止対策と近年の文化財修理一」 2018年 9月 1日 (土)～10月 4日 (木)
- 特別展「西行 一紀州に生まれ、紀州をめぐる一」 2018年10月13日 (土)～11月25日 (日)
- 企画展「熊野と和歌浦 一きのくにの名所をたずねて」 2018年12月 8日 (土)～2019年 1月20日 (日)

和歌山市立博物館

- 特別展「お殿様の宝箱 一南葵文庫と紀州徳川家伝来の美術一」 2018年 9月15日 (土)～10月21日 (日)
- 史跡散歩「和歌山城を歩く」 2018年11月10日 (土)

高野山霊宝館

- 第39回大宝蔵展「高野山の名宝“もののふ”と高野山」 2018年 7月14日 (土)～10月 8日 (月祝)
- 秋期企画展「“香り”の荘厳」 2018年10月13日 (土)～2019年 1月14日 (月祝)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 写真上：瓦葺き前の主屋屋根（南東より見る） 写真下：主屋南東隅での軸組修理の様子
- 2 特集「旧西村家住宅の保存修理 (3)」
- 6 埋蔵文化財課 短信「吉礼Ⅲ遺跡の発掘調査」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具 ③ レフランプ」
「新宮文化の多様性」
- 8 催し物案内

風車84 (2018・秋号)

平成30年9月30日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp